

ようこそ、笑顔咲く長崎県へ

Nagasaki Discovery Magazine ni-ko-ri

長崎県

ながさき
にこり

諫早市

水と暮らし、
水と生きる

No.

21

世界文化遺産候補

明治日本の 産業革命遺産 九州・山口と関連地域

「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」が世界文化遺産候補としてユネスコへの推薦が決定しました。

福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、鹿児島県、山口県、岩手県、静岡県の8県にわたる28の資産で構成され、本県では、端島炭坑(軍艦島)を含め8つの資産があります。

これらの資産は幕末から明治期にかけて、日本が、造船、石炭、製鉄・鉄鋼などの重工業分野において、西欧地域以外で最初に急速な産業化を遂げた一連の過程を示す産業遺産群です。

長崎県は「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」の世界遺産登録を推進しています。

〔資産所在地:長崎県 長崎市〕

小菅修船場跡

長崎造船所 第三船渠

長崎造船所 旧木型場

長崎造船所 ジャイアント・カンチレバークレーン

長崎造船所 占勝閣

高島炭坑

端島炭坑

旧グラバー住宅

世界遺産登録推進室 TEL.095-894-3171

にこり

表紙のはなし 唐比(からこ)れんこん
諫早市森山町唐比地区で採れるレンコン。泥炭質の土で育つ珍しいレンコンのため「幻の唐比レンコン」と言われ、ホクホクとした食感と長く糸を引くのが特徴です。

平成25年12月発行
編集・発行/長崎県広報課 〒850-8570 長崎市江戸町2-13
TEL.095-895-2021 メール:ni-ko-ri@pref.nagasaki.lg.jp
デザイン/(有)イースワークス 印刷/(株)インテックス
http://www.pref.nagasaki.jp/bunrei/kenseijoho/koho/johoshi/

長崎県

定期購読(無料)の申込はこちらから



長

崎県のはほぼ中央に位置する諫早市は有明海、大村湾、橋湾の三つの異なる海と多良山系の山々に囲まれた自然豊かなまちである。

多良山系は長崎県と佐賀県の県境の東西に連なる山々で、最高峰の経ヶ岳をはじめ多良岳、五家原岳が主要な三座。この標高千メートルほどの多良山系は、昔から信仰の場として人々の心の拠りとなっている。

多良山系の伏流水を源流とする川は四方に流れ、市の中心部を流れる本明川はもちろん轟峡、富川溪谷など、自然の恵みをいたるところで感じることができる。

多良岳の山腹に諫早の人々が一際大切にしているお寺があるという。その寺を目指し、霧の中を進む。ひんやりと、そして涼とした山の空気。静寂の中、山を踏みしめる足音だけが響く。寺の名は金泉寺という。

水と暮らし、
水と生きる

諫早市

金泉寺

高野山真言宗 天良嶽山

「こんな場所には」と
思わずため息がこぼれる。
そこには
幻想的ともいえる
風景が広がっていた。



高野山真言宗
太良嶽山金泉寺
諫早市高来町善住寺1130-1
TEL.0957-22-8325
(諫早観光物産コンベンション協会)
金泉寺 諫早 検索

美しい寺で 美しい神様に会う。

あ、ここには神様がいらっしやる
なあ——寺の前に立った瞬間に、
素直にそう思った。

ここは平安時代の初め頃（八〇六—八
〇七）、弘法大師空海が建てた格式高い
寺院である。行基菩薩の足跡を訪ねた弘
法大師は、多良岳の山頂から少し下った
こんこんと清水が湧き出るこの場所に寺
を建立し、自ら不動明王と二童子立像を
刻んで本尊としたという。豊かな水は弘
法大師の心に響いたのだろう。寺は「金
泉寺」と名付けられた。

真言宗の修験道場として多くの信徒に
崇められてきた金泉寺。最盛期の江戸時
代には三十七の宿坊があり、六百人もの
修行僧がいたという。しかし千二百年の
間には、キリスト教徒の焼き討ちに遭う

など、苦難の歴史もあった。その際、こ
本尊は僧侶が守って山を下ったという記
録が残っている。

金泉寺のお堂はこれまでに何度も建て
替えられてきた。檀家がいないため、お
堂の再建費用はすべて人々の浄財であ
る。それは二〇〇九年に完成した現在の
お堂も同じ。多良山麓に住む人々はおも
ろく、浄財は全国各地から集まり、立派
なお堂が建てられた。このことを見て
も、人々の金泉寺に対する強い想いが伝
わってくる。

お堂の中にはキリスト教徒の焼き討ち
の際、僧侶が命懸けで守ったご本尊のほ
かに、千手観音像が祀られている。これ
は第七代諫早領主茂晴の母、お糸の方が
奉安したもの。元禄十二（一六九九年）の

大洪水と、翌十三年の大干ばつによって
諫早の領民たちは多大な被害を被った。

そのことに心を痛めたお糸の方は、中国
の商船に千手観音像の調達を依頼。当時
は金色に光り輝いていたという。十七世
紀後半に中国で作られたこの千手観音像
は国宝級の価値が認められている。優し
げなお顔に死者の冥福を祈り、領民の安
泰を願うお糸の方の心が表れていた。

千二百年の間に、一体どれだけの人か
この寺に手を合わせてきただろうか。静
けさに包まれた約千坪の敷地に立つと、
確かに人智を超えた力があることを感じ
る。金泉寺——その美しい響きは、山を
下りたあとも心に小さな明かりを灯して
くれた。

千手観音像

三百年の間に
黄金は剥がれ落ちてしまった。
しかしその威厳に満ちた優しさは
どれだけ月日が経っても
変わらない。



金泉寺山小屋

まるで昭和に
タイムトリップしたかのような
山小屋では
温かいコーヒーと
笑顔が待っている。

金

泉寺のすぐ隣には山小屋がある。昭和四十七年に長崎県が登山客のために設置したもので、現在は多良岳登山者山の会みなさんが管理運営をしている。週末と祝日、祝前日には管理人が常駐しており、宿泊も可能。九州で一年を通して有人の山小屋は、唯一ここだけだ。

山小屋の中はなんともいえない風情が漂う。電気が通っていないため、登山客は夜になるとランプの明かりの下で語らう。山小屋では登山客のために一年中薪ストーブが焚かれている。管理人の渡辺靖男さんにコーヒーを淹れていただいた。山で味わうコーヒーはどうしてこんなにも美味しいものなのだろう。ほっと息をついた。

渡辺さんによれば、年間一万人以上もの登山客がこの山小屋を利用しているという。「多良岳は一年中、登山客がいます。多良山系は植物の宝庫で、その数は五百種類以上。特に夏にはオオキツネノカミソリという美しい花が咲きます。多良山系はこのオオキツネノカミソリの日本一の群生地として有名なんです。夏だけでなく、元日の朝日を目掛けて登る人もいれば、雪が降ったら登るという人もいますよ」。この日も山小屋では多良岳に何度も登っているというご夫婦がお昼のひとときを楽しんでいた。

ここから山頂までは約三十五分。山小屋は、ラストスパートの前の至福の休憩スポットである。

金泉寺山小屋

諫早市高来町善住寺1130-1

TEL.0957-22-8325(諫早観光物産コンベンション協会)

TEL.090-7463-4944(多良岳登山者山の会 渡辺)

金泉寺山小屋 横濱



連理の枝

轟溪流
諫早市高東町善住寺
TEL.0957-22-8325
(諫早観光物産コンベンション協会)
轟溪流 検索



観音滝

轟溪流



ヒメシヤラ

一步一步
歩みを進めるごとに
自然と一体になる。

多

良岳に水源を発する轟溪流には、高さ十二メートルのダイナミックな轟の滝を皮切りに、大小三十余りの滝が連なっている。夏にキャンプを楽しんだことのある人もいると思うが、多くの人は下流にあるこの轟の滝で満足しているのではないだろうか。確かに轟の滝の迫力には圧倒される。しかしながら轟溪流は上に登るほどに、魅力的な風景が展開されていくのだ。

大正から昭和にかけて、滝には名前が付けられた。下流から潜龍滝にはじまり昇龍滝、白糸の滝……最後は見納の滝。目を閉じると、水音が銀の鈴の音のように聞こえることから銀鈴溪と名付けられた滝は、水の流れが二筋に分かれている。

ガイドの増山忠男さんが「ぜひとも見てほしい」と案内してくれたのは、上流から三つ目の観音滝である。ふかふかの落ち葉を踏みしめながら山道を歩いていくと、美しい滝が姿を現した。そこは秘境という言葉がぴったり場所。その昔、金泉寺の住職が滝ごとにお地蔵様や

観音様を祀ったそうだが、それらは昭和三十二年に起きた大水害で消失してしまった。このとき無事だったのが一体の観音様。この小さな観音様の見つめる先に優美な観音滝はある。

増山さんは轟溪流の魅力を「大自然そのもの」だと話す。観音滝へ向かう山道でそれを実感した。澄み切った空気、変化に富んだ川の流れ、大きな岩を抱え込むようにして根を張る巨木。そして何よりも目を惹いたのは「ヒメシヤラ」である。鬱蒼とした森の中に、黄金色の樹木が真っ直ぐに伸びる姿には神々しさすら感じた。老樹の幹は玉ねぎの皮のように剥離するそうで、まるで人が磨いたように艶やかだ。県内でもヒメシヤラの群生地はここ轟溪流だけだという。

轟溪流には信じられないような珍しい樹木が存在する。増山さんが目を輝かせて案内してくれたのが銀鈴溪のそばにある「連理の枝」。なんと二本のサザンカの木が上方で繋がっているのである。どちらの木から伸びた枝なのか、継ぎ目すら分からない。その手を繋いだような姿から縁結びのご利益があると、多くの人が訪れているという。

滝といえば夏に涼を求める場所、ましてや冬に訪れようなど考えたこともなかったが、増山さんは笑顔でこう話す。「轟溪流は春の新緑も秋の紅葉も素晴らしいんですが、冬のつららもそれはそれは見事なんですよ」。



諫早市富川町
TEL.0957-22-8325
(諫早観光物産コンベンション協会)
富川溪谷 検索

富川溪谷

多良山系の奥深くにある富川溪谷。岩壁に刻まれた五百羅漢像は、元禄十二年の大洪水、翌十三年の大干ばつを契機に犠牲者を弔い、天下泰平を祈願して、時の諫早領主茂晴の発願によってなされた。重機のない時代にとのようにして彫られたのだろうか。高い岩壁にも羅漢像は見られ、その数は五百十体にもほる。



多良山系の周辺には自然の恩恵を感じるスポットが数々存在する。その代表的なものを紹介しよう。

多良山系の 周辺を楽しむ



諫早市白木峰町826-1
TEL.0957-23-9003
白木峰高原 検索
コスモス花宇宙館 検索

白木峰高原

一・一ヘクタールの広大な土地に春は十萬本の菜の花、秋には二十萬本のコスモスが咲き誇る。中にはラッパ型や八重の花びらを持つ珍しいコスモスも見られる。美しい花々もさることながら、目の前に広がる雲仙岳や諫早平野、有明海など、花々と一緒に雄大な景色を楽しめるのも魅力。そのほか昼間でも太陽や明るい星を観測できる「コスモス花宇宙館」が隣接している。



「太良嶽縁起」書によれば、釈迦、弥陀、観音の三柱大権現は元インドのマガタ王国の国王で、座禪岩のある多良岳の峰から峰へ回峰修行したという。この修行のことを仏教用語で「修多羅」ということから名付けられた。多良岳の名前もこれに由来する。周辺には水神池をはじめ、いくつかの水汲み場があり、名水を求めて県内外から多くの人が訪れる。

修多羅の森



諫早市高来町折山855-4
TEL.0957-22-8325
(諫早観光物産コンベンション協会)
修多羅の森 検索

御手水観音



諫早市御手水町1643-2
TEL.0957-22-8325
(諫早観光物産コンベンション協会)
御手水観音 検索

古くから観音霊場として知られており、現在も滝修行に訪れる人の姿が見られる。断崖に埋め込まれた銅鏡には、当時の領主の娘が戦の際、難を逃れるためにこの地に籠もり、そのため命が助かったことに感謝して寄進したものだという伝説が残っている。本物は戦時中に失われたものの、地元の人たちによって復元品が寄進された。参道左手の磨崖仏はどれも柔和な表情で、昔は彩色が施されていたという。





大楠



諫早の 真ん中を ぶらり歩く。

ながさき
にこり

ふるさと再発見



踏みしめる
足元から
石に刻まれた
歴史が
語りかけてくる。



諫早ボランティア
観光ガイド
志岐秀臣さん

諫

早のまちには、歴史と文化が色濃く残っている。

諫早という地名が初めて文書に登場するのは鎌倉時代。その頃はまだ「伊佐早村」という表記であった。南北朝時代は伊佐早地方を二分していた勢力も戦国時代になると、西郷尚善が統一。以後、伊佐早は約百年に渡って西郷氏によって治められた。

状況が一変するのは四代目西郷信尚の時代だ。一五八七年、豊臣秀吉の島津攻略の命令に背いた信尚は秀吉の怒りを買って、龍造寺家晴によって城攻めに遭う。立て籠って必死の抵抗を試みたものの、信尚は遂に城から敗走することとなってしまった。その後、二代目龍造寺氏は自らの姓を「諫早」と改め、隣接の佐賀鍋島藩の支藩となりながらも、明治維新まで諫早の地は諫早家によって治められた。

現在、市民の憩いの場として親しまれている「諫早公園」は、西郷尚善によって築かれた山城の址である。園内を歩いてみると、敵の勢いをそぐ目的で造られた急な坂とカーブの構造が見られる虎口や、食糧や武器を保管する建物があったと考えられる本丸の址などが見られ、ここが山城だったことがよく分かる。

緑豊かな諫早公園だが、この緑は特別なもの。なんと縄文時代前期頃に茂ったと思われる暖地性の森林が自然のまま残っているのである。中には稀少な植物の群生も見られ、周囲一キロメートルに

渡って丘陵一帯が国の天然記念物に指定されている。まちの中心に、こんなにも手つかずのまま自然林が残っていることに驚いた。

本丸の手前で出会う大楠も圧巻だ。ガイドの志岐秀臣さんは「この大楠は樹齢六百年とも八百年ともいわれています。山城ができる前からこの場所にあったんですね」と話す。西郷軍は龍造寺家晴率いる三千五百もの軍勢に総攻撃を受けたという。この大楠はその凄まじい戦いも見てきたのだろう。

諫早公園で最も有名なのが眼鏡橋だ。これは度重なる水害にも負けない橋を造ろうと、一八三九年に本明川に架けられたもの。しかしあまりの頑丈さゆえに、昭和三十三年の大水害の時に壊れず、かえって水の流れをせき止めてしまい、大きな災害を引き起こす一因となってしまった。その後、石橋としては全国で初めて国の重要文化財に指定され、昭和三十六年に諫早公園へ移築、現在に至る。橋を渡ってみると、足裏に伝わる感触から橋の頑丈さが伺える。志岐さんは言う。「諫早は石の産地で、昔から腕のいい石工さんが多いんです。階段がある眼鏡橋は大変珍しいのですが、これも高い技術の表れです」。決して壊れないことから今や恋愛のパワースポットとして注目を集めている眼鏡橋も、昔は子どもたちが歌いながら渡っていたという。「いさはやの眼鏡橋 行き戻りすれば おもしろかなり」。



おみやげは
寺院に眠る
美しい修行僧の
激しくて
切ないおはなし



放課後の
笑い声を
BGMに
江戸時代の
名庭園を歩く。



諫早公園
諫早市高城町770-2(眼鏡橋)
TEL.0957-22-8325
(諫早観光物産コンベンション協会)
諫早公園 検索

天祐寺
諫早市西小路町1116
TEL.0957-22-8325
(諫早観光物産コンベンション協会)
天祐寺 検索

は雪山に夢中となり、何とか気を惹こうと手を尽くすものの、雪山は「私は仏に仕える身」と見向きもしない。その態度に怒った側室は、領主に「雪山から言い寄られた」と訴え、それを信じた領主は雪山の打ち首を命じる。雪山は「潔白を証明するために、私の赤い血を白い血に変え、ここに刺す松の小枝を茂らせてほしい」と仏に念じ、松の小枝を逆さにして地面に刺した。雪山の首が落とされたとき、真っ赤な血は白色に変わり、逆さまに刺した松はその後、青々と成長したという。雪山の無実は見事に証明されたのだ。雪山が処刑された場所は今でも「逆さ松」と呼ばれているそうだ。

天祐寺には諫早家代々の墓があり、今も大切に守られている。町中とは思えない静かな境内を歩いていると、心がすーっと落ち着く。「訪れた方にはぜひゆっくりと諫早のまちをご覧ください。いいですね」と志岐さんは話す。なるほど、諫早は駆け足でまわるにはもったいないほどに面白い歴史が眠っている。

諫早公園に隣接する県立諫早高等学校の敷地内に「御書院」がある。ここは西郷尚善が屋敷を構え、その後、龍造寺家晴によって壮大な屋敷が構えられたといわれている場所。「ここにあった屋敷には、九十五もの部屋があったそうです。側室同士で顔を合わせないようになっていたそうですよ」と志岐さん。現在、堂々たる屋敷は見ることができないが、日本三大名園のひとつに数えられるほど立派だったという庭園は、今もその面影を随所に残している。

諫早に石工の名人が多いということを高城神社で実感した。手作業で造られたとは思えない大燈籠や、口の中の玉が動く狛犬など、一目で高い技術力が伺える。例えば、富川溪谷の五百羅漢像にしても、御手水観音の磨崖仏にしても、石の文化を感じさせるものが、諫早のいたるところで見受けられる。

最後に訪れたのは、諫早家の菩提寺である天祐寺。見事な山門をくぐると、堂々たる佇まいの本堂が現れる。紅葉の時期は一際美しいのだろう。イチヨウやモミジの大きさが天に向かって伸びていた。志岐さんが「天祐寺には好きな言い伝えがある」と教えてくれた。

江戸時代、天祐寺に雪山という大変美男の修行僧がいた。雪山の噂は街まで広まり、寺には若い娘の参詣が増えた。その頃、ある一人の女性が雪山に一目惚れした。この女性、実は領主の側室。側室



森太白飴

60年以上にも渡って森さんご夫妻が作ってきた太白飴は、添加物を一切使わず、デンプン、麦芽、黒糖のみで仕上げたシンプルさが魅力。昔ながらの製法を守り、原料の水飴から袋詰めまで工程は全て手作業。食べるほどにほんわかと気持ちまで温かくなる逸品だ。

森太白飴本舗
諫早市城見町19-2
TEL.0957-22-0462
森太白飴 検索

日本一の牡蠣 華漣

2012年「第1回かき日本一決定戦」で見事初代王者に輝いた絶品の牡蠣。小粒だが、味が濃厚で旨味と甘味が優れ、食べ応え充分。小長井町漁協の直売所で購入できるほか、敷地内には牡蠣小屋が設置され、購入した牡蠣を焼いて食べることができる。

小長井町漁協直売所
諫早市小長井町通竹816-3
TEL.0957-34-2336
小長井町漁協 検索



杵の川 特別純米酒・吟醸

創業1839年の長崎を代表する酒蔵。芳醇な米の旨さが際立つ特別純米酒は、濃厚な味付けの料理と相性がぴったり。フルーティーな香りの吟醸はやや辛口のすっきりとした印象で、魚介類と一緒に楽しみたい。どちらも特別な日に味わいたい一本。

杵の川酒造
諫早市土師野尾町17-4
TEL.0957-22-5600
杵の川酒造 検索

高原なたね油

白木峰高原の菜の花から生まれた料理用の「なたね油」。毎年、白木峰高原育成会のみなさんによって年間約200本ほど作られている。白木峰高原やコスモス花宇宙館などで販売。

白木峰高原育成会(事務所)
諫早市白木峰町828-1
TEL.0957-23-9003



黒おこし

創業220年を誇る老舗の「黒おこし」。黒砂糖の粒がたっぷり入った独特の香ばしさと歯ごたえ、素朴な味わいが特徴だ。

菓秀苑 森長
諫早市八坂町3-10
TEL.0120-054-514
森長 検索



黒おこし

「諫早おこし」として親しまれている黒おこし。サクサクと香ばしいお米と味わい深い黒糖が絶妙のバランス。

つかさ本舗
諫早市永島東町5-5
TEL.0957-22-2380
つかさ本舗 検索

おこし

諫早の伝統的なお菓子といえば「おこし」。おこしは藩が許可していた数少ない菓子のひとつで、現在でも米どころ諫早を代表する銘菓。黒おこしなどの定番商品に加え、近年は洋風のおこしも登場するなど、店舗ごとに新しい動きが見られる。美味しい水と米があるからこそ生み出される味わいをご賞味あれ。



白おこし

もち米を使用した、しっとりとした柔らかさが特徴のおこし。ソフトな歯触りと、やさしい甘さがクセになりそう。

杉谷本舗本店
諫早市八坂町6-10
TEL.0957-22-2306
杉谷本舗 検索



諫早で出会った 美味しいもの



諫

早のまちの中心を流れる本明川は、これまでに幾度となく氾濫し、そのたびに多くの命が失われてきた。

富川溪谷の五百羅漢像の説明板には「元禄十二（一六九九）年八月十三日、本明川の大洪水により諫早領は死者四百八十七名、桶三千九百三〇石が減収という大きな被害を受け」とある。また、諫早公園の眼鏡橋の説明板には「昭和三十三年の諫早大水害」で「死者行方不明者五百三十九名の大きな犠牲者を出した」とある。

このまちの人は自然の恵みを受ける一方で、何度何度も川に翻弄されてきた。毎年七月二十五日、本明川では川まつりが行われている。この日は、昭和の水害で亡くなった人々を慰霊するため、みんなで手を合わせる。

諫早では会う人、会う人が水害の話を語る。自然の話、歴史の話、先祖の話……何を話題にしても、どこかでそれは水害とつながっていく。しかし、それは悲しい話ばかりでもない。

老舗の和菓子店の女性は「筆筒の中から昭和初期に使っていた包装紙が見つかったんです。昭和の水害にも負けず、残っていたんですよ」と話してくれた。この店では、創業当時のレシビを掘り起こし、見付かった包装紙に包んで「復刻版」として新たな商品を生み出していた。

本明川では子どもたちが遊び、のんびりと散歩を楽しむ人がいる。それはこのまちの日常の風景である。川沿いには家が建ち、ビルが建つ。何度辛い目に遭っても、このまちの人々は水と暮らし、水と生きている。その人々の強さこそがこのまちの財産なのかもしれない。

これまで
これからも
この川とともに。



諫 早市高来町の金崎地区。ここに地元の農家の方たちが先祖代々栽培してきた在来種のそばがある。金崎地区には昔から年の瀬にそばを打ち、日頃世話になっている人たちに年越しそばを振る舞う風習があった。このそばの食べ方が実に独特。井鉢に茹でたそばと茹で汁を入れ、生醤油で味を調える。柚子ごしょうとネギを入れたら出来上がりだ。このシンプルな食べ方は、どろりとした食感から地元では「どろりそば」と呼ばれている。

長い間、わずか十数軒の農家の方たちだけで食されてきたそばは、まさに「幻のそば」。今から三年前、この幻のそばを「まちの特産品にしよう」とする声が生まれた。もちろん、理由はその美味しさにあった。

恵みの歳時記
多良山系の
恵みから
生まれた

幻の 高来そば



幻の高来そば振興協議会
鎌早市高来町小船津363-5
TEL.0957-27-7500
幻の高来そば 検索

幻のそばは いま 夢のそばへ

んなに美味しいそばは食べたことがない」と言ってくれた時は嬉しかったですね」と松永さんは顔をほころばせた。

そこまで聞いては、食べずには帰れまい。特別にそばを茹でていただいた。「最近はおつゆをおすすめするんですが、本来の生醬油でどうぞ」と出されたそばは、驚くほど濃厚な香りを放っている。正直、生醬油だけの味付けに期待はしていなかったのだが、これが美味。感激の美味しさである。幻の高来そばは、実は小粒だが、香りの高さと粘り気

が特徴だという。なにより多良岳の名水で打ち、茹でるのでから味は保証されている。

松永さんは「当初三・四ヘクタールだった町内の栽培面積も、今年は十四・九ヘクタールまで広がりました。協議会を結成してから順調に進んでいます。今後は来ていただいた方々に食べていただけるようにそば屋のオープンも目指していますし、インターネット販売も開始し、全国に広めていきたいですね」と話す。幻のそばは、夢のそばになろうとしている。

二〇一〇年に高来町の農家の人たちによって「幻の高来そば振興協議会」が結成された。事務局を務める松永孝典さんによれば、十数軒の農家でしか作られていないそばを特産品にするため、まずはじめに会のメンバーが取り組んだのはそばの栽培だったという。金崎地区の農家から少しずつ種を分けしてもらい、耕作放棄地を活用してのそば栽培が始まった。次に認知度を高めるために各

地のイベントに積極的に出店し、多くの人に食べてもらう機会を設けた。そして遂に二〇一三年の一月には「幻の高来そば生麵」の販売を開始。毎朝、松永さん自らが麵を手打ちし、直売所で販売している。

松永さんには東京にそば好きの息子さんがいる。美味しいそば屋があると聞けば、信州や北海道まで足を運ぶという。「帰省して幻の高来そばを食べた息子が「今まで食べたそばで一番香りが高い。こ

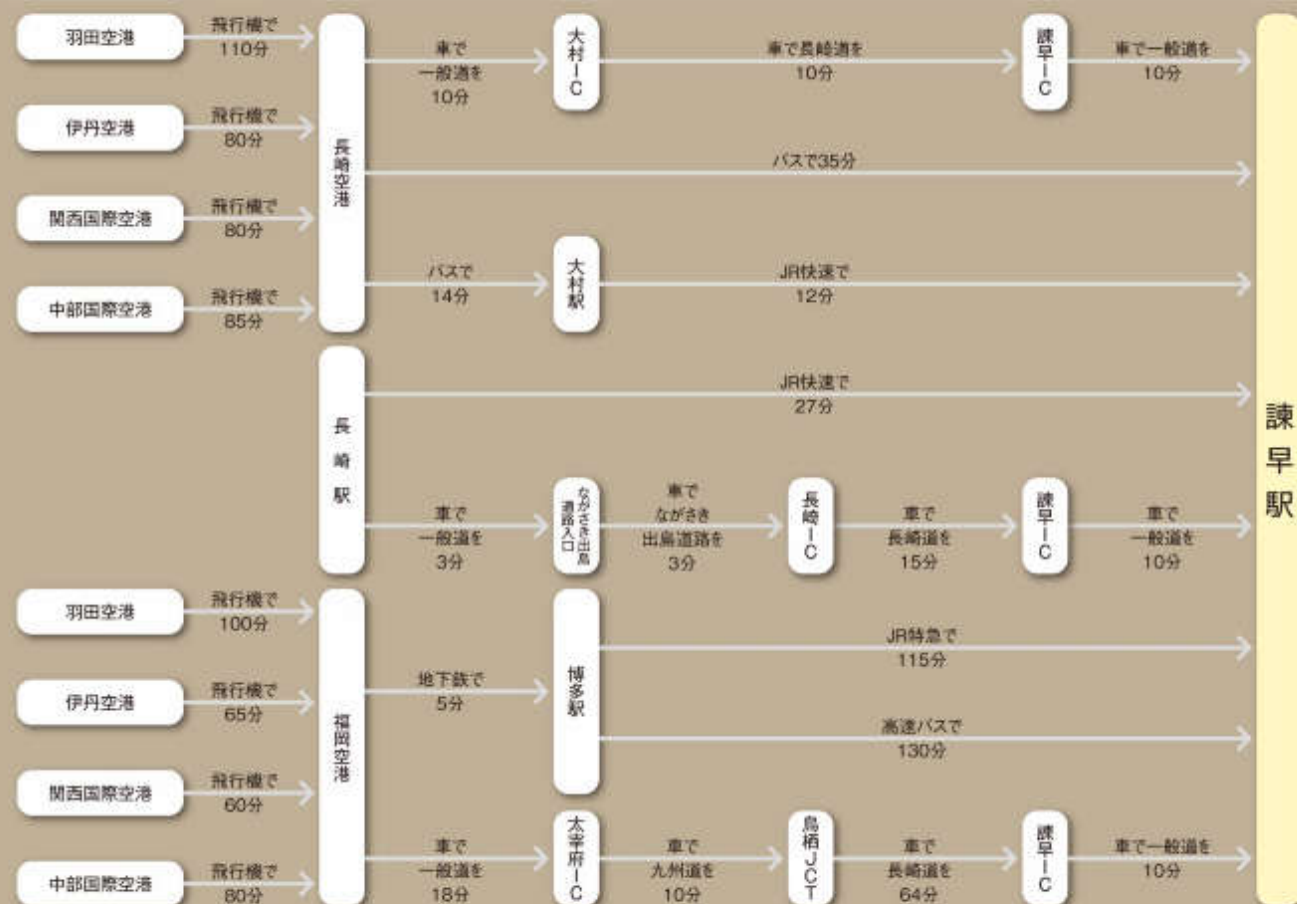
香り高く 滋味豊か

「幻の高来そば」はスタートしたばかり。ぜひ多くの方に食べてほしい。

幻の高来そば振興協議会
事務局長 松永孝典さん



諫早市へのアクセス



P R E S E N T S

にこりプレゼント Nagasaki ni-kori Presents

A 小長井町漁協 牡蠣セット

5名様

小長井牡蠣が育つ有明海は、多良山系から流れ込む川が栄養を運ぶ牡蠣にとって最高の環境です。そんな栄養豊富な有明海で育った小長井町漁協自慢の牡蠣と、牡蠣のしぐれ煮の詰め合わせセットです。



C 杵の川特別純米酒・吟醸酒セット

5名様

P16で紹介した杵の川の特別純米酒・吟醸酒セット。芳醇な米の旨さが際立つ特別純米酒、フルーティーな香りの吟醸酒です。

B 森太白飴

5名様

P16で紹介した森太白飴です。余計な添加物を一切使わずデンプン、麦芽、黒糖のみで作ったシンプルさが魅力の飴です。



読者アンケート

本誌に対する皆さまの率直なご意見やご感想をお寄せください。抽選で、魅力的な県産品をプレゼントします。

締切/1月31日(金)

※消印有効

■応募方法

アンケートの回答、希望のプレゼント名、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を必ず記入し、ハガキまたは簡易電子申請システムで応募。※お一人につき、1応募まで。

■ハガキ 〒850-8570

長崎県広報課「ながさきにこり」係

■簡易電子申請システム

パソコンWEBで

長崎 簡易電子申請 検索

■アンケート

Q1 本誌をどこで手に入れましたか。

(例)定期購読、県庁、観光窓口、空港、WEBなど

Q2 本誌の魅力が伝わりましたか。

- よく伝わった
- まあまあ伝わった
- どちらともいえない
- あまり伝わらなかった
- 伝わらなかった

Q3 その理由やご意見などを教えてください。

Q4 「受け継がれる遺産」、「デザインモノがたり」のご感想をご記入ください。

Q5 その他、本号に対するご意見・ご感想があればご記入ください。

Q6 冊子版の定期購読(無料)を希望しますか。
○希望します
○希望しない
○定期購読中

当選/2月中旬抽選・商品発送予定。当選は、商品の発送をもって代えさせていただきます。

“日中友好は長崎から”

日中平和友好条約締結35周年
長崎県日中親善協議会設立40周年 記念訪問



楊潔篪國務委員(右)と会談する中村知事

2013年は、日中平和友好条約締結35周年と長崎県日中親善協議会設立40周年の節目の年です。これを記念して11月4日から8日まで、中村知事を団長とする約100人の訪中団が北京・上海を訪れました。

北京では、楊潔篪國務委員や中日友好協会の唐家璇会長などの要人と会談を行い、日中交流における本県の役割や地域間交流の重要性、今後の交流拡大への期待を確認。また、政財界や中日友好協会の関係者など総勢約240人が参加する交流レセプション「日

中友好の懸け橋 長崎県のタベ」を開き、観光や長崎鮮魚、お茶など、本県の魅力をPRしました。

上海では、中国東方航空(MU)グループ代表との会談や県内大学の帰国留学生との交流会など経済、文化における交流を実施。

各地で暖かい歓迎を受けた中村知事は、「今回の訪問を日中関係改善の一助にしたい」と述べ、両国関係に明るい展望を感じさせる訪問となりました。



北京で開催されたレセプション「日中友好の懸け橋 長崎県のタベ」



レセプションであいさつする中村知事

日本画家 松尾敏男氏 名誉県民に



中村知事から顕彰状が贈られました。

文化勲章を昨年受章した日本画家・松尾敏男氏(長崎市出身)に名誉県民の称号が贈られました。名誉県民は、ノーベル化学賞受賞の下村脩氏に続き、4人目です。

10月1日に行われた顕彰式で、中村知事が「名誉県民として顕彰することは、県民の大きな喜びとなります。」と讃えると、松尾氏は「本当の長崎県民になった。来年の大作には長崎を描き、感謝の気持ちを込めた

い。」と語りました。

松尾氏は大正15年長崎市に生まれ、3才まで居住。日本画界の第一人者として、わが国の芸術文化の振興に大きく貢献され、優れた作品を本県に数多く寄贈されるなど、本県の芸術文化の発展に大きな貢献をいただいています。

ふるさと長崎への思いを強める松尾氏の、今後ますますのご活躍をお祈りいたします。



知事と記念の握手



《月光のサン・マルコ》2001年



《羊しき人》1977年

松尾敏男氏 略歴

大正15年	長崎市今戸町(現・鍛冶屋町)に生まれる
昭和18年	日本画家 壺山南風に入門
昭和24年	第34回再興院展に《蟻輪》が初入選
昭和45年	第55回再興院展にて《樹海》が日本美術賞・大観賞を受賞
昭和54年	《サルナート想》により昭和53年度日本藝術院賞受賞
平成12年	文化功労者顕彰
平成21年	日本美術院理事長に就任
平成24年	文化勲章受章

デザインの
モノがたり

3

BARAMON

五島手延うどん／1袋200g(2人前、あごだし粉末スープ付)525円

矢堅目の塩／1瓶50g 630円 かんころ餅／1個200g 420円

株式会社フジオカ TEL.095-813-8135 長崎市田中町582-4

BARAMON 検索

以前、五島を旅したとき、お土産選びに苦労したことがある。どれも五島ならではの美味しいものだが、友人に渡すにはパッケージが地味過ぎる…。このときの想いを払拭してくれたのが「BARAMON」だ。株式会社フジオカの藤岡秀則代表は企画の意図を「五島にある本場にいいものを県外の人にもっともっと知ってもらいたかった」と話す。藤岡さんが目指したのは女性に手にとっても使える、お土産にぴったりのデザイン。そこで白羽の矢が立ったのが、デザイナーの羽山潤一さんである。

羽山さんは上五島へ渡り、まち歩き、海を見て、製麺所へも足を運んだ。まちには至るところに椿の花が自生し、波は思ったよりも力強い。そして作っている人たちは皆一生懸命だった。

羽山さんは言う。「行ってみたいと分からないことがあります」。藤岡さんへと提出されたデザインやネーミング案は十種類以上。三つの商品を別々にデザインするつもりだった藤岡さんにとって目からうろこだったのは、それぞれの商品を一つのブランドイメージとしてデザインする提案だった。そして五島らしいモチーフを盛り込み、素朴で可愛い今回のパッケージが選ばれた。羽山さんが商品パッケージを手掛ける際にいつも目指しているのは「つい手にとりたくなるもの」。BARAMONのデザインは、まさにそれだ。

羽山さんに一番気に入っているデザインを尋ねたら「矢堅目の塩」という答えが返ってきた。矢堅目とは、五島列島西方にある海上航

BARAMON

(五島手延うどん、矢堅目の塩、かんころ餅)

路の目標ともなっている円錐形の奇岩のことで、複雑な海岸線と相まって、その景観は上五島を代表する美しい風景のひとつとなっている。デザインはこの矢堅目と波をモチーフにしている。これも上五島へと渡ったからこそ生まれたデザインだ。パッケージデザインの力は大変大きい。県内の人が自家消費として購入していた商品が、見事にお土産としての地位を確立し始めた。女性たちが思わず友だちに自慢したくなる——柔らかな優しいデザインはそうした力を秘めていた。



羽山潤一
デザイングラフィック
アーティスト
グラフィックデザイナー

※「長崎デザインアワード」とは、県内で企画・開発された商品の中から優れたデザインを選定・表彰し、県内企業のデザイン開発意欲やデザイン力の向上に寄与することを目的として開催している。

長崎デザインアワード2013

大賞

五島らしさを
めいっばい詰め込んだ
お土産にピッタリの
可愛いパッケージ



カクレキリシタンの信仰

文 青来有一 text by Seina Yumichi

十 年ほどまえになるが、「名作をポケットに」というNHKのテレビ番組に出演したことがある。小説のゆかりの土地をたずねる番組で、遠藤周作の「沈黙」がとりあげられたときの案内役になった。

わけていて、遠藤周作記念館も外海の崖のうえに建つ。二月のもっとも寒い底冷えがする時期だった。長崎市街地からぬけて撮影スタッフはバンに乗って外海の海岸線を走った。灰色の雲が角力灘（すもうなだ）をおおき、ときおり雲間から光がさして鉛色の海が点々と金色にかがやく。空と海と光が海岸線でお互に雄大な遠景は昔も今も変わってはいないだろう。

ちはたずねた。村上家はキリシタンの組織では「帳方」と呼ばれる役職にあり、「水方」「問役」に補佐されて指導者の役割をつとめてきた。一六四四（正保元）年、国内に信徒を指導する宣教師がひとりもいなくなり、一八七三（明治六）年にキリシタン禁教令の撤廃までの潜伏キリシタンの時代、こうした組織で信仰を守り続けてきたという。ロザリオなど先祖から受け継いできた品々を見せていただいたあとで、村上さんは口承で伝えられてきた折りのことば、オラシヨの一節を唱えてくださっ

た。口ごもるようなほとんど抑揚もないオラシヨは、耳を澄ましていなければ風の音にもかきけされてしまいそうな、ほそそとした低いつぶやきだった。

「カクレキリシタン オラシヨ——魂の通奏低音」（長崎新聞新書）には、生月島や平戸、五島など長崎県下のカクレキリシタンの信仰の現在の姿がわかりやすく紹介され、「外海のカクレキリシタン」の章では村上茂さんも登場する。

著者の宮崎賢太郎氏は、禁教時代のキリシタンを「潜伏キリシタン」、明治以降にカトリックにもどった人々を「復活キリシタン」と呼び、禁教時代が終わっても、潜伏時代と変わりなく神社やお寺と関係を保ち、当時の習わしや行事を伝える人々を「カクレキリシタン」と呼んで区別することを提唱している。

「日本の伝統的な宗教風土のなか

で年月をかけて熟成され、土着の人々の生きた信仰生活のなかに完全に溶け込んだ、典型的な日本の民俗宗教のひとつ」として、カトリックとは異なり、また、隠れてもいない現在のカクレキリシタンの信仰の「美しい表情」に目を向けるようにうながしている。最初にこの考え方を知ったとき、「信徒発見！」といったちょっとした感動をおぼえた。外海だけでなく、生月島や平戸島、五島にもカクレキリシタンが今もいる、ということになる。

朝、起きて、働いて、夜、眠る——単調な日々が延々とくりかえされるなかで伝えられていくものがある。苦しみも悲しみも喜びもすべてそこにしみこみ、なんども触れているうちに磨かれて、ある日、手もとになめらかな輝きをふつと見いだす——。二十一世紀のオラシヨにはそんな美しさがあるのかもしれない。村上茂さんはあれから数年後に亡くなったが、「帳方」の役割は息子さんが受け継いでおられるようだ。

長崎には今もカクレキリシタンがいる。私たちが暮らしている風土のなんとまた豊かなことだろう。



出津教会（長崎市外海町）

せいらいいゆういち／1958年長崎市生まれ。2001年「聖水」で第124回芥川賞、2007年「爆心」で第43回谷崎潤一郎賞、第18回伊藤整文学賞を受賞。